

## 「2つの異なる言い方」で学ぶ日本語会話音声

橋本慎吾（岐阜大学）

意図や態度、感情のように様々な要因によって現れ方が異なる情報（パラ言語情報）に焦点を当てた日本語音声教育の実践について報告する。

学習言語の音声実現は言語情報の実現であっても習得が困難な側面があり、また母語ではない言語を話すことは自分の言語ではないので意図や感情を表すことがそもそも難しい。またその音声ที่เหมาะสมなものであるかどうかを自身で判断することはできない。

そこで、会話を行う話者2名（学習者1名を含む）と、その会話が適切かどうかを判断し調整する日本語母語話者1名による会話作成課題を行なっている。その課題の一つは「同じ言葉（例：え、そうなんですか）が異なる言い方になる2つの会話を作成し演じる」という課題である。

2012年度から2018年度までに行われた会話作成課題における「え、そうなんですか」について、(1)2つの会話における「え、そうなんですか」の音声特徴（持続時間・高さレンジ）の差、(2)相手の発話内容による音声特徴の違い、(3)話題の違いによる音声特徴の違い、の3点を分析した。その結果、次のことが明らかになった。

(1) 2つの会話における言い方の差は「発話間ポーズ」と「高さレンジ」に表れている。

(2) 直前の相手の発話に含まれる情報の違いによって持続時間と高さレンジが異なる特徴を示している。

(3) 話題の違い（「雨降り」と「メ切日時の間違い」）により、発話間ポーズ、「え」の高さレンジと持続時間に異なる特徴がみられる。話題に対する話者自身の驚きの度合いが音声特徴に反映されている。

また別の実践では、同じ文が違う意味を表すもの（二義文）を単独で発話する（例：彼、失敗しないだろうね）という課題を行なっているが、こちらは表そうとした意味と逆に捉えられる場合が見られる。文脈のない単独発話であることも一因であると考えられる。